



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレター 第581号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセンターニューズレター 第581号. 京大東アジアセンターニューズレター 2015, 581

ISSUE DATE:

2015-08-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/198924>

RIGHT:

2015 年 8 月 3 日発行 第 581 号

CONTENTS

上海街角インタビュー ㊦	2
読後雑感：2015 年 第 18 回	4
【中国経済最新統計】	19



上海街角インタビュー ⑨①

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長（海外委員）

順利包装集団董事（在上海）

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

上海の小学1年生の夏休み

以前、上海の小学1年生の一日を追いかけたことがあった。この子も1学年が終わって夏休み、9月から2年生になる。上海の公立小学校の1年生は宿題が多い。毎朝、3時間近く机に向かっている。今回は小学1年生の夏休みの一日を追いかけてみた。

1. 学校から配布された夏休みの生活指導指針

* 月曜～金曜は毎朝必ず宿題をやること

* 土曜、日曜は休息日にして宿題はやらなくてもよい

* 標準的な一日の生活

7時 起床

7時半 朝食

9時から12時まで宿題3教科（間に適宜休憩を入れる）

国語：教材の漢字の読み書きを完全に覚える

偏の異なる漢字が識別できるようになる

算数：二けたの足し算、引き算がすばやく出来るように繰り返し練習

英語：アルファベットの大文字、小文字を完全に覚える

小文の読解力を養う

午後からは自由に過ごそう

21時就寝

* 登校日：7月3日、8月23日

2. 小学1年生（女兒）の一日

起きるのは大体8時頃、朝食を終えて9時から宿題開始。その日の気分で宿題の順番は変えている。45分くらいやって、15分の休憩。休憩時間はiPad

で漫画を見ている。漫画は SNS の“優酷”で無料ダウンロードしている。父親は技術コンサルタントをやっているので、家で仕事をすることが多い。勉強を教えるのは父親の役目、塾の講師が務まるくらい上手に教えている。共働きの家庭は祖父母が教えているようだ。

宿題は宿題帳と 3 教科のドリルがあり、宿題帳には毎日 3 教科が子供の興味を惹くような内容で作られている。国語の小文にはちゃんと抗日戦争の故事が配置されていた。

午後からは習っているピアノの練習を 30 分、これは土、日も毎日やっていた。これまでいろいろ習い事に挑戦していたが、今はピアノと絵画の二つに落ち着いている。“好きこそ物の上手なれ”で、ピアノと絵を描くのは好きなようで、親に言われなくても進んでやっている。この子の伯父さんは高名な画家なので才能の片鱗を引き継いでいるのかもしれない。伯父さんの勧めで、専門家を養成する絵画塾のジュニアコースに通っている。(両親は好きなことをやらせる主義で、才能にはあまり期待していない様子)

友達の多くは何らかの習い事をやっているようで、よく遊びに来る男の子は習字、女の子は数学とバレエを習っている。

習い事教室や家での練習が終わって友達が遊びに来るのは 15 時以降、アイさん（お手伝いさん）や祖父母が送ってくる。両親が共働きしている家庭が多いが、我が追っかけ女兒の母親は専業主婦なので友達が集まってくる。

土、日は宿題をしなくてもよい日で、我が追っかけ女兒は、土曜は完全フリー、日曜は朝からピアノ教室、午後から絵画教室に通っている。中国では子どもの交友関係は親の収入・教育レベルが同程度の枠内に限られているので、夏休み中の土、日はホームパーティやプール、遊園地へ行くなどの交流をやっている。また、学校も社会性を身に着けるために、仲の良い友達の家泊まりに行くことを推奨している。

私が追っかけをしている小 1 女兒は、典型的な上海の上位中産階級の家庭である（戸建て住宅、庭の池には鯉が泳ぎ、乗用車保有）。生まれながらにして中国の階層社会の生き方を学び、小 1 から学歴社会の競争に順応出来る訓練を受けている。中国人としては幸せな部類に入ると思うが、過保護でかなりスポイルされているようにも思える。

以上

読後雑感：2015 年 第 18 回

03.AGU.15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

《老人問題特集》

- | | |
|----------------------|-----------------|
| 1. 「老人たちの裏社会」 | 2. 「老人に冷たい国・日本」 |
| 3. 「下流老人」 | 4. 「老後破産」 |
| 5. 「日本で 100 年、生きてきて」 | 6. 「ほんとうの贅沢」 |
| 7. 「老いては自分に従え」 | 8. 「死に方の思想」 |

7 月末、厚生労働省から、「日本人の平均寿命は女性 86. 83 歳、男性 80. 50 歳」と発表された。その上、がん・心臓病・脳卒中の 3 つの病気で亡くなる人がいなくなれば、女性 6.02 歳、男性 7.28 歳の寿命が伸びるという。この調子で行くとおそらく近年中に、医学の進歩が人生 90 年時代をもたらすだろう。厚生労働省は、この平均寿命とは別に、「健康上の問題では日常生活が制限されない期間を示す“健康寿命”も算出し、女性 74.21 歳、男性 71.19 歳」と発表した。つまり男女とも、70 歳半ば以降の約 10 年間は、「健康上の問題で、日常生活を制限される（社会や他人の世話になる）生活をおくる」ということである。これは日本にとっても、私個人にとっても切実な問題である。この“健康寿命”という考え方からすれば、あと数年で日本には半病人があふれかえることになり、その結果、国家財政はますます窮迫することが明白であり、同時に、私にも健康で生きることが許される期間はあと 4 年しかないということだからである。

老人問題は現代日本が解決を迫られている緊急課題である。同時に日本がこの問題に直面する先頭ランナーだけに、世界中が日本の動向に注目している。また私自身も老人の一員として、この問題の現実的・思想的・財政的解決を迫られている。しかしこれは人類の未体験ゾーンであるだけに、私も日々、先達の意見を参考にしながら、格闘し続けているが、おいそれとは結論が出てこない。仕方がないので、ひとまず、現時点での私の老人問題への新視点を以下に提起しておく。

・私は、「団塊の世代は、飢えと戦争を経験しなかった、歴史上、唯一の幸せな世代」であると考えている。現在の日本の老人問題は、このことを前提として考える必要がある。つまり飢えと戦争を経験せず、幸福な生活を満喫した世代が、今、精神的・肉体的・財政的な蓄えのない老人となり、ウロウロしているのである。

・私は最近、「老人を年齢で区切って捉える」ことは間違いではないかと思うようになった。100歳でも精神的、肉体的、財政的に60歳代と変わらぬ老人もいる。たとえば、むのたけじ氏は、「今は、老いることで人間をくず扱いするじゃないの。でもそれは間違いよ。おれなんか70歳より80歳、80歳より90歳と、ますます頭よくなってきたもの」と啖呵を切っている。むの氏は、「“高齢者”という呼び方ね。高齢者があるなら低齢者がなきゃいかんでしょ。でも青少年にそんなことは言わないじゃない。そして“後期高齢者”なんてのまで考えついた。それから老後とは何だ。老いはあるけど、老いた後とは何だ。よけい者だというのでしょ。高齢も老後も老人を侮った言葉ですよ」と語っている。つまりむの氏は、高齢者、老人、老後という言葉の定義を明確にして、論を進めなければならないと言っているのだと思う。反対に、60歳代でも認知症を患ったり、肉体的ハンディを背負ったりして、“健康寿命”をオーバーし、老人化している人もいる。私は老人について、年齢、精神、肉体、財政などの面での新定義が必要だと思う。

・私は数十年前から、「老害」について言及してきた。多くの優秀な人間が、60歳代に入るや否や、とたんに愚策を弄すようになる事例をたくさん知っていたからである。かつて私はその理由を、「人間は60歳代に入ると、死を意識するようになり、人生に対するあせり、あきらめ、わがままなどの感情が噴出し、モラルが崩壊する」からであると説明した。実際、私もその年代に入り、その感情を追体験することになって、その考察が正しかったことが検証できた。たしかに老人の内面には「わがまま」になり、モラルが崩壊してしまう面が大きく実在しており、不良老人化する要因が現存しているのである。その意味で、今後、社会には不良老人が激増する可能性がある。したがって老人問題は、性悪・生善両面から考える必要がある。

島田氏は不良老人現象について、「現代は経験がどんどん更新されてしまい、個人ではなくて社会全体に蓄積されていきます。芸能や特殊技能を持っていれば別ですが、老人の価値は残念ながら年を重ねるにつれて低くなってしまふのです。すると老人にはかなりのストレスが溜まります。昔は若者が

キレると言われましたが、現代は老人がキレる。それはその人が、社会からは重要視されているかどうかというところと関係しています。昔でいうと不良の若者は、

社会から必要がないと言われ、キレる。そうすることでしか、人間としての存在感を示せないわけです。だからかつて若者の犯罪と言われていたものが、そのまま高齢者に移ってしまっています」と解析している。私もこの解析が当たっていると思う。

週刊文春 8/6 号に、「素晴らしき 100 歳の“超わがまま”養生訓」という記事が載った。そこでは 100 歳を超える著名な老人たちが、長命の理由や現在の生き様を語っている。それらには“超わがまま”という言葉は当てはまらない。微笑ましいエピソードばかりである。ここに登場している人たちは、100 歳に至っても、社会にその存在感を示し続けいる人たちであり、老人という範疇に入らない人たちである。

・老人問題には、常に自己責任論がつきまとい、多くはそれを非難し、資本主義社会における格差問題などに帰結させようとする。私はそれらの主張を否定はしないが、自己責任論も捨てきれない。イソップ童話の「アリとキリギリス」を持ち出すまでもなく、やはり人間一般は、キリギリス的な面を持っているからである。たとえば、私が社長をやっていたとき、社員たちに、「老後に生活費はいくらいるか」という話をして、「今の給料ではそれを積み立てることは不可能であり、年金も崩壊するかもしれないので、それを可能にするためには管理職になるか、高度な技術を身に付けるか、どちらかを選択する必要がある。わが社は、そのチャンスを全社員に公平に与える」と続け、具体的な手立てを示した。しかし残念ながら、ほとんどの社員が現状維持に甘んじて終わってしまった。

また私は若いときから、「酒・タバコを嗜まず、マージャン・カラオケ・ゴルフ・賭け事をやらず、自家用車・自宅を持たず、ブランド品などに手を出さない」という信条を守ってきた。多分これで、一般の人よりは 1000～3000 万円の金銭の節約になっていると思う。たまにテレビなどで、タバコを吸いながら、缶ビールを片手にしたホームレスの姿を目にすることがあるが、ついつい「これをやらなければ、ホームレスにならなくてすんだらうに」と思ってしまう。

・多くの論者は、「老人が社会保障制度を利用するのは権利であり、恥ずかしく思ったり、気後れする必要はない」と主張する。私もこれに同意する。しかし、生活保護などの受給者は、「受けられてありがたい。できるだけ早くこ

の状態から脱却し、自分も他人を助ける方へ回りたい」と考え、そのように努力すべきであると思う。とにかく「食るのが権利である」という思想では、あまりにもみすぼらしいではないか。また税金をたくさん払い、社会保障の負担を背負っている側は、「助けさせてもらってありがたい」という心を持つ必要がある。これはどこか宗教臭い論だが、性善説に立てば当然のことである。

・藤田氏は、無料低額宿泊所などのような「貧困ビジネスが下流老人たちの周辺で暗躍している」と書き、これを悪役にしている。これもすでにメディアなどで報道されており、衆知の事実であるが、未解決のままである。私は、それよりも「現代の医療ビジネスが老人と国家を食い物にしている」ことの方が、はるかに重大であると考えている。藤田氏も本書で、「老人が下流化する大きな原因の一つに、想定外の病気や怪我がある」と書いている。しかし、現実には、現代医学の魔法にかかって、想定外の病人にされてしまっている場合も多い。医療ビジネス界にこそ、大きなメスを入れる必要があるのではないか。

・多くの人が、「老後の安定」を望む。しかし「安定は望んでも手に入らない」のが人生の常である。ビジネスをやっていると、そのことがよくわかる。不安定を恐れず、果敢にそれに挑み続けることが大事なのである。100歳を超えて、なお矍鑠としている老人たちは、「老後の安定」など望まず、チャレンジし続けており、変化を楽しんでいる。

・老人にも、「孤独をこよなく愛す」精神が必要である。孤独死など、何も恐れる必要はない。島田氏は、太田氏の「一番よいのは国外へ出ること、そして未開民族の仲間に入れてもらうことである。パスポートを捨てて、いくらかの土産と金を持って行けば歓迎してくれる。そこで行き倒れになれば、適当に始末してもらえる。私はこれを望んでいる」という言を紹介している。最近、私の考えも、この太田氏に賛同できる部分が多くなってきている。「姥捨て山」ではないが、日本の僻地に、「老人安楽死特区」を作ったらどうかと考えてもいる。

1. 「老人たちの裏社会」 新郷由起著 宝島社 2015年2月24日

副題：「万引き、暴行、ストーカー、売春…… 他人事ではない長寿社会のリアル」

帯の言葉：「“長生き”は本当に万人に幸せなのか 不良化する高齢者が急増 何が彼らをそうさせるのか」

本書は、老人を性悪説の視点から考えたもので、異色の書である。3面記事的でのぞき見趣味的な面があるが、これも現代の老人の一側面として把握

しておく必要がある。不良老人が跋扈する未来への警告の書であり、偽善者ぶって老人悲哀説を説く本が多い中で、この本は現代の老人問題を考える上で、欠かせぬ1冊だと思う。

最近、巷でよく、「“長生き”は本当に万人に幸せなのか」という言葉を聞くようになったが、この本を読むと、その現実がよくわかる。本書の「万引き検挙者のおよそ3人に1人が老人であり、嘆かわしいことに、万引きする年寄りをアルバイト店員の若者がたしなめる時代になっている」という記述には、私も驚いた。また60～80代の高齢男性のストーカーや自らの意思で性風俗店で働こうとする70代女性などの不良老人の存在を、私は本書で知り、愕然とした。このような不良老人たちは自制心をなくし、高齢者＝弱者とみなされることを逆用し開き直ってしまっており、始末に負えないという。

ある心理学者は、「人間が自制心を働かせる動機は二つしかありません。一つは恐怖による支配で強制されて生まれるネガティブな動機、二つ目は“自分はかくりたい”といった美意識によるポジティブな動機の自己規制です。老いの美意識を持てないまま、恐怖による源がすっ飛んでしまえば、恐いものなしの状態になって暴走を招くのも致し方ないと言わざるを得ないでしょう」と書いている。まさに団塊の世代の老人は、「“老いの美意識”を持ち続ける」ための思想・哲学を構築しなければならないだろうし、老人相互間で恐怖牽制を行うようなシステムを創設・構築しなければならないかもしれない。

また本書は、「これまでは“やり残したことはないか”“命を燃焼し尽くして人生を生き切ったか”などと追求、検証する間もなく先に寿命が来てしまっていた。余計なことを考える間もなく、生活に追われ、生き続けるのに必死なうちに息絶えるのが当たり前だった。飛躍的に長くなった老年期を、連日、“3食昼寝付き”で過ごすのが物足りない、何らかの刺激や快楽を求めて迷走する様は“贅沢病”とも言い換えられるのかもしれない」、「少子化で労働力の低下が叫ばれる今日、“枯れない”高齢者を1日も早く、上手に社会のなかで有効活用しない限り、超老人大国となるこの国はいずれ潰れてしまおうと感じている。“時間があり過ぎて困る”とぼやく高齢者が呆れるほど多いのだ。彼らの余暇とエネルギーを無駄使いさせていることこそ、この国の大きな損失だろう」と書いている。私も老人の一人として、同感である。

本書は、今後、日本社会に不良老人が増加することを、明確に警告している。老人は社会に甘えることなく、死ぬ間際まで社会貢献を心がけるべきであり、社会に迷惑や負担をかけることを避ける努力をするべきである。それ

が「老いの美意識」というものではなかろうか。

2. 「老人に冷たい国・日本」 河合克義著 光文社新書 2015年7月20日

副題：「“貧困と社会的孤立”の現実」

帯の言葉：「“大切なもの”が欠落する日本の社会保障・福祉制度

“高齢者3000万人時代”に必要な視点 そして問題解決へのシナリオ」

本書は、日本における老人の現状の調査結果を、詳細に書き込んでいる。しかしそれらは、すでにメディアなどで紹介し尽くされたものが多く、斬新なものではない。著者はそれらの調査に基づき、貧困が孤立死を招いていると指摘し、餓死する老人の例を多く上げている。また孤独な老人への聞き取り調査も詳しく行っており、それらの老人の多くが糖尿病を患っていると書いている。私は、「糖尿病は贅沢病」だと考えている。糖尿病を治すには、ダイエット、断食などを含めて粗食にすることである。逆に言えば、粗食であれば、糖尿病になる可能性はきわめて少ないのである。餓死する可能性もある老人の多くが、糖尿病であるという事は、実に奇妙な現象である。残念なことに、著者はこのことにまったく気付いていない。つまり孤独や孤立死の真の原因を見通すことができていないのである。

著者は多くの統計数字や調査結果を並べ、「先進国の中では、日本ほど“老人に冷たい国”はない、とつくづく思う」と書き、「今後、高齢者が急速に増えることが社会の大きな負担になると言われ、人数の多い団塊の世代は肩身が狭い。団塊の世代が後期高齢者になる年が、危機のピークだ。そのときのための準備をしなければならない。国民全体がそう言われているように思う。しかし団塊の世代は、戦争の影響で、限られた期間に多く生まれたのである。その世代は、日本の成長を担った人びとである。日本はなぜ、これほどまでに、“老人に冷たい国”なのか。高齢者を敬愛し、生きがいを持てる健全で安らかな生活を保障するために、いまある貧困と社会的孤立の問題を解決しなければならない。“老人に冷たい国・日本を変えるために”」という美辞麗句で、本書を締め括っているだけである。そのための具体的な手立ては何も示していない。

3. 「下流老人」 藤田孝典著 朝日新書 2015年6月30日

副題：「一億老後崩壊の衝撃」

帯の言葉：「年収400万でも、将来、生活保護レベルの暮らしに！？」

本書も上掲の「老人に冷たい国・日本」（河合克義著・光文社新書）と同様に、統計数字や個別調査によって、日本の老人の置かれている悲惨な現状を浮き彫りにしようとするものである。しかし下流老人に対する自己責任論に

反駁し、下流老人を蝕む組織に言及し、下流老人にならないための自己防衛策を提唱している点で、上掲著よりは中身が濃い。まず藤田氏は、下流老人を「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義し論を進め、その下流老人が、「現在日本に、推定 600～700 万人」はいると言ひ、論を進める。この藤田氏の下流老人についての定義については理解できるが、この定義には大きな欠陥がある。それは高齢者の定義をしていないことである。高齢者は精神的・肉体的・財政的に千差万別であり、その高齢者をどのように定義するかによって、対策も結論も大きく違ってくる。本書で藤田氏は高齢者について、単純に「後期高齢者」を想定しているようである。

藤田氏は下流老人になる要因を列挙した後、下流老人の社会に与える悪影響について言及し、「①親世代とこども世代が共倒れする、②価値観の崩壊、③若者世代の消費の低迷、④少子化を加速させる」と書いている。この中の①、③、④については、屁理屈の類である。なぜなら①を回避する手立てはいくらでもあり、③の下流老人になることへの不安が消費を低迷化させると考えるのは、あまりにも短絡的であり、④の少子化を加速させるのは別の原因の方がはるかに大きい、からである。また③については、現代社会における主流の思想や哲学からすれば悪影響であるが、未来社会の新思想や新哲学から考えれば、まったく問題にはならない。つまり老人が長生きしなければ全ての問題は氷解するからである。

藤田氏は、「高齢者はこれまで家族を養い、社会や経済の発展に寄与してきた存在である。たいていの文明社会においては、高齢者は多くの人びとから尊敬されるはずだ。しかしこのままいくと、社会的な役割を十分に果たしてきたにもかかわらず、**高齢者が尊敬されない時代が近いうちに到来する**だろう。今はまだ、“長生きすることが素晴らしい”という共通認識があるが、長生きする人間が社会の重荷になるのであれば、それは生命の価値自体が軽んじられることにもなりかねない」と書いているが、「**高齢者が長生きしないで、社会に貢献して死んで行くことの方が、もっと尊敬される**」ということを見落としている。もっとも藤田氏は、「長生き、老人、高齢者」などの定義をしていないので、議論が噛み合わないと思うが。

藤田氏は自己責任論に反駁して、「本来、“責任”と“権利”は別次元のものである。たくさん働いて金持ちになるか、ほどほどの生活でいいのかは、個人の責任に応じた自由だ。しかし“健康で文化的な最低限度の生活を営むこと”や“個人の生命が守られること”は、すべての人に与えられた“権

利”である。それを守るために税金の存在意義があるということを、わたしたちは理解しなければならない。わたしたちの税金をたくさん使う者は“悪”であり、容認しがたいという意識を根本から変えなければ、社会保障の意義自体を失うと言ってもいいだろう」と書いている。たしかに性善説に立って考えれば、この藤田氏の主張はまともに聞こえる。しかし、多くの人が、**「税金をできるだけ払わないように算段一つまり義務を避けよう」とし、「権利を最大限に貪ろうとしている」**のが現実である。現在、もっとも大事なものは、**「義務を喜んで最大限に果たし、権利の主張を必要最小限にとどめる」**というような老人道徳を育むことなのである。

さらに藤田氏は、**「ある議員が、“生活保護を受けることが恥ずかしいと思わなくなったら良くない”**と述べている。単なる社会保障制度を利用することに、なぜ恥ずかしいと感じる必要があるのだろうか」と書いている。これも現代社会においては至極当然な意見である。私は**「生活保護を受けることを恥ずかしいと思え」**とは言わないが、少なくとも、**「生活保護を受けられることに感謝し、できるだけ早くその状態から脱却し、他人を助ける側に回り、受けた恩を返す」**と思うべきだと考える。しかし現実には、そのように考える人は少なく、そのように行動する人はさらに少ない。むしろこの制度を悪用する人が多いのが、性悪な人間がひしめく、この世の現実なのである。

藤田氏は、無料低額宿泊所などのような**「貧困ビジネスが下流老人たちの周辺で暗躍している」**と書き、これを悪役にしている。これもすでにメディアなどで報道されており、衆知の事実であるが、未解決のままである。私は、それよりも**「現代の医療ビジネスが老人と国家を食い物にしている」**ことの方が、はるかに重大であると考えている。藤田氏も本書で、**「老人が下流化する大きな原因の一つに、想定外の病気や怪我がある」**と書いている。しかし、現実には、現代医学の魔法にかかって、想定外の病人にされてしまっている場合も多い。医療ビジネス界にこそ、大きなメスを入れる必要があるのではないか。

4. 「老後破産」 NHK スペシャル取材班 新潮社 2015年7月10日

副題：「長寿という悪夢」

帯の言葉：「“こんな老後を予想できなかった”、“早く死にたい” 年金生活者が些細なきっかけで陥る“老後破産” あなたも例外ではない！」

本書はまず、「“老後破産”の高齢者を仕方ないと切り捨てるのか、問題解決に向けて一歩踏み出すのか。何よりもまず、今何が起きているのか現実を

みつめることからスタートしなければならない。「現場」からしか議論は始まらないのだ」と書き、上掲著「下流老人」と同じく、可哀相な老人の生活の現状を、書き綴っている。また本書も 60～80 歳代を一括りにして、高齢者＝老人として扱っており、きわめて乱暴に「現場」からの発信を行っている。たとえば、「“老後破産” のきっかけとなるのは、病気やケガなど、高齢になれば誰にでも起こり得る事態だ」と書き、その例として、80 歳の男性が前立腺がんとなって、その手術と術後の療養のために大金を使い果たし、「老後破産」状態となったことを上げている。これはまったく常識を逸した話である。60 歳そこそこの男性ならば、手術は選択肢の中に入ってくるが、普通、80 歳代の男性ならば、前立腺がんの手術はしない。手術したところで、数年寿命が伸びるだけだということはわかっているし、それが「老後破産」に直結することは自明の理だからである。60 歳と 80 歳では、状況がまったく違うのである。こんな単純なことを無視して、現場発信を試みる本書は、高齢者の不安をいたずらに増幅させるのみであり、問題解決への道を指し示すことはできない。

本書は、「本心を言うとね、早く死にたいんですよ」という老人の言葉を紹介し、「年金収入が足りないために、生活が苦しかったり、医療にかかれなかったりすることも、それだけで深刻な事態だが、それで“死にたい”のではない。本当に辛いのは、人や社会との“つながり”を失い、誰のために、生きているのか分からなくなってしまうことにあるのではないだろうか」と書いている。たしかに、人間が老人になってから、生きがいや死にがいを持つことは、きわめて難しい。だからこそ、若いときから生きがいを持って、死にがいを求めていきなければならないのである。現代社会がそのモラルを醸成できなかったところに、問題があるのである。「早く死にたい」などと口癖のようにいう老人は、「社会のために役に立って死ぬ」ということなど、考えたこともないだろう。その気になれば、その場はいくらでもあるのだから。

5. 「日本で 100 年、生きてきて」むのたけじ口述 聞き手：木瀬公二 朝日新書 2015 年 7 月 30 日

帯の言葉：「戦争、原発など 戦後をみつめる老記者の伝言 あきらめず努力すれば、願いはきっと結ぶ」

むの氏は今年で 100 歳。本書はむの氏が、2009 年つまり 94 歳のときから現在までに、朝日新聞岩手・秋田版に連載した「再思三考」150 編中から 86 編を抜粋、収録したものである。本書でむの氏は、「今は、老いることで人間をくず扱いするじゃないの。でもそれは間違いよ。おれなんか 70 歳より 80

歳、80歳より90歳と、ますます頭よくなってきたもの」と啖呵を切っている。さすがに、そのむの氏でも自筆は無理で、本書は口述となっているが、本書におけるむの氏の時局評論は、自賛にふさわしく、そこに「頭の冴え」を見ることができる。それは100歳とは、到底思えない。むの氏の頭脳年齢は60〜70歳だと考えても不思議ではないと思う。本書を読むと、精神世界においては、単なる年齢では高齢者・老人の定義ができないことが、よくわかる。

むの氏は、「“高齢者”という呼び方ね。高齢者があるなら低齡者がなきゃいかんでしょ。でも青少年にそんなことは言わないじゃない。そして“後期高齢者”なんてのまで考えついた。それから老後とは何だ。老いはあるけど、老いた後とは何だ。よけい者だというのでしょ。高齢も老後も老人を侮った言葉ですよ」と語っている。つまりむの氏は、高齢者、老人、老後という言葉の定義を明確にして、論を進めなければならないと言っているのだと思う。

むの氏は、「私は50歳ぐらいから、自分を戒める言葉を心に描いて文章を書いてきたの。最初の10年は“一人称の主語を明確にして文章を書け”だった。漠然と、“我々は”と言うけど、“我々”とは誰なのか。私の他に誰が入っているのか。それを誰に向かって書くのか。“あなた”の場合でも、それはどこの誰なのか。そういう点を一番先に明確にすることが必要だ、と考えたわけだ。そうすることで、その文章に責任が持てることになる。主語があいまいだと、誰が責任を負うのかがあいまいになる」と語っている。この主張には私もまったく同感である。私もこれまでの私の文章を、すべて第一人称で書き連ねてきた。そして自らの実体験を織り交ぜながら書く努力を重ねてきた。また実名で責任の所在を明確にしてきた。それは自らが無責任な評論家に堕してしまうことを避けたかったからである。

むの氏は、「私は敗戦の日に朝日新聞を辞めた。“負け戦”を“勝ち戦”とウソの記事を書いて読者に届けてきた責任を取らなければならないと思ったからです。でも今は、あの時の判断は浅すぎたと思っています。辞めずに残って、なぜあの戦争が起こったのか。なぜ止められなかったのか。本当のことを書く新聞だったら開戦の日や、南方で多くの兵隊が亡くなった日々をどう書いたか。そういう検証記事を書かなければならなかったな、と思ったからです」、「8月15日に、編集局の中で、“時間は遅れたけど、本当のことを読者に届けましょう”という人が一人でもいれば、全員が賛成して、“遅くなりましたけど本当はこうでした”という新聞を作ったはずなんです。編集局

にはなんとかしなければという雰囲気が漂っていましたから。読者にお詫びして、そういう新聞をつくり続け泣けばいけなかった。それに気づかなかった。一番、反省するところです」、「それにしても、敗戦の時のオラたちはバカだったな。開放感が先に立って、この戦争は何だったのか。誰が何のために計画したのか。自衛権まで否定していいのか。そういう勉強をやらなかった。憲法 9 条なんて当たり前だから放っておいた。それがよくなかった」と語っている。その上でむの氏は、「ジャーナリストとは何か。一番大事な任務は、社会の歩みに間違いがあったら正す。権力が隠そうとしていることを暴き出し、社会の動向について正しい方向に先導するということです」と語っている。

むの氏は慰安婦問題について、インドネシア戦線での自らの体験談として、「(慰安婦は) 朝鮮の女性 5、6 人に男が 1 人で 1 グループ。それが何組もいた。日本の女性もいて、それは将校担当だった。だまされてきたのか、自分で来たのかわからなかったが、女性たちの多くは「お金をためている」と言っていた。夫の写真を持っている人もいた。稼いでいたことは確かだった。現地で聞いた範囲では、強制連行はなかった。ただそこに行くには軍用船に乗るしかない。乗るには軍の許可が必要だった。軍は、軍事作戦の一環として必要としないものには許可しなかった。要するに、どう取り繕おうが、軍が絡んで慰安婦を戦場に連れてきたことは否定できないんだ。強制連行など表だったことはやらず、全部陰に隠れ、幽霊みたいな存在で業者を動かしていたということでしょう」と語っている。

6. 「ほんとうの贅沢」 吉沢久子著 あさ出版 2015 年 1 月 21 日

帯の言葉：「毎日を気ままに 誰に気兼ねなく 生きるという幸せ」

本書の著者の吉沢氏は、上掲のむの氏より 3 歳若く、今年で 97 歳の女性である。吉沢氏は高齢にもかかわらず、むの氏と同じく、今日に至るも旺盛な執筆活動が続けている。この二人の著作に接していると、精神面においては、二人とも 60～70 歳代だと言っても過言ではないほど、若い印象を受ける。この二人は、精神面における老人・高齢者の定義が、年齢という物差しでは明示できないという生き証人でもある。

吉沢氏は、「老いてこそ、自分の足で立ちたい。人によりかからず、自分らしくいたい。自立したい。私はそうありたいのです」と書き、「自立しようと心に決めたとき、必ず必要になるもの。それは自力で生活できる基盤です。精神的に自立するだけでは、本当の意味で自立できないからです。やはり経済的にも自立する必要があります」と、経済的自立を強調し、高齢になって

も年金以外の収入の道を確保していることの重要性を説いている。

吉沢氏は、「いくつになっても、変化を怖がらずに、意欲的でいられる。そうあれば幸せだと思います」、「変わることを恐れない。その勇氣を持つと、人生楽しく過ごせると思うのです」と書いている。これは老人一般が持つ「安定志向」への鋭い批判である。私も同感である。人生とは安定を求めてもそれを得ることは難しいものであるから、吉沢氏の言うように「不安定を恐れず、変化を楽しむ」ことが重要なのである。そのように自らの思想を作り上げることが必要なのである。

吉沢氏は、67歳のときに夫に死に別れ、それから30年間、一人暮らしを続けており、「ひとりの暮らしは、必ずしも寂しさや孤独につながるものではありません。ひとりと上手に付き合っていければ、人生はいくらでも楽しくなります」と断言している。私もまったく同感である。

7. 「老いては自分に従え」 山藤章二著 岩波書店 2015年6月18日

著者の山藤氏は、まえがきで、「昔の老人のように立派な頑固さは持ち合わせていないが、78歳の年相応の価値観や美学はある」と述べている。そして老人の山藤氏は、「“モウロクとイリュージョンの老人コラムというのをやらせてもらえませんか？”と“週刊文春”に売り込んだ。客観的に見れば77歳から新しいコラムを連載してくれ、なんてのは暴挙である。若手で才能ある書き手が行列しているのに、そこに割り込んだ」と書き、その理由について、「週刊誌に2本、月刊誌に1本の連載があるのに、そこに新しい仕事をねじ込んだ。この無茶な振る舞いをさせたものは何なのだ？ クールに自己弁護をすれば、“メディアホリック”である。メディアとの関係を絶ちたくなかったのだ。締め切りがあり、ネタを生み出す苦勞あり、絵や文字にする表現の苦勞あり……、大変な重い荷を好んで背負うことで、長年続けてきた自分のリズムを乱さないようにしたかった。老化防止にはこれがもっとも効果的な生活であると判断したからだ。もしこういうメディアとの関係から離れて、のんびり生き延びるための老後の趣味を考えついたら、この重い荷を負う道を選ばなかったかもしれないが、どう考えても、仕事に代わる充実した趣味なんかひとつも思いつかなかったのである」と述懐している。山藤氏が本音を書いているのは、本書の全編を通じて、この個所のみである。

この旺盛な活動精神を持ち合わせている山藤氏は、78歳でも老人の範疇には入らない。

8. 「死に方の思想」 島田裕己著 詳伝社新書 2015年7月10日

帯の言葉：「葬式を行わない直葬が首都圏ではすでに1/4に！ 死ぬときに何を遺せる？ 死

ぬときに何を頼れる？」

著者の島田氏は、過去においてオウム真理教と深いつながりを持っており、まだそれへの慚愧の念を表明していないという。そのことに目を奪われずに、先入観なしでこの書を読めば、本書における「死に方の思想」は参考になる。

まず島田氏は、「昔は 60 歳まで仕事をし、80 歳で死ぬという人生が普通だった。けれどもいまは、80 歳まで働いて、100 歳まで死ぬ社会になっている。60 歳から 80 歳までどうやって働くのか、考えなければいけない」、「現代の人間は“死”そのものよりも、“死に至るまでの過程”に対して、大変な不安を持っているということです」と書き、「現代では圧倒的に多い“勤め人”は、いやでも定年を迎えます。ではどう生きれば、長くなった“余生”を楽しめるのか。関心の持続と言いますか、絶えず新しいものに関心を持てるかどうか重要なのではないのでしょうか。新しいものへの関心を持ち続ける、瑞々しさが大事なのだと思います」、「人間はなにかに夢中になっている間は、死への恐怖など感じないものです。たとえば、読書に熱中しているとき、その世界に没頭しているときに死を想うことはないでしょう。コンサートで音楽を聴きながら、立ち上がって踊っているとき、死が怖いということもありません」と説いている。これは当たり前であり、万人に納得のいく主張である。

そして島田氏は、「現代人の多くは仕事から引退し、余生は何とか年金で生きていくことができるでしょう。けれど何も残せないままに死んで行くのです。すると、“自分の人生とはいかなるものだったのだろうか”と考えざるを得ない。孤独死、無縁死も恐ろしいと思うかもしれませんが、その前に“自分の人生はいかなるものであったか”という壁に、われわれの多くは直面せざるを得ないのです」と続ける。またその孤独について、「人が孤独には死なない、ということは“孤独には死ねない”の裏返しです。他者との強いつながりの中で自由に生きることが理想なのかもしれませんが、それは容易に実現することではありません。そういう意味で、“孤独死”“無縁死”は自由を求めて力強く生きたことの証と言えるのかもしれません」、「都会に出ることによって、自由を得たわけです。逆に言うと、制約がないということです。ところが制約がなければ、自分ですべて決めなければなりません。よほど自分でしっかりと決められる人以外は、人生の目的もはっきりしないものになってしまいます。決定的なのは、残すものが何もないことです」と書き、「全般的に現代は、親が長生きしすぎて、おまけに元気すぎるのです。本

来なら親はもっと早く、子どものために死ぬべきなのです。そうすることで、大人になる機会を与え、責任を持たせることができます。子どもは親の目を気にしないで自由に生きることができます」と、極論を述べている。

また島田氏は安楽死について、「オレゴン州では、1998年に尊厳死を認める州法が制定されてから、2013年までにすでに752人の人たちがこの法律に基づいて自ら死を選んでいきます。安楽死には、消極的安楽死と積極的安楽死というのがあります。延命措置を中止して死に至るというのが消極的安楽死で、致死薬を与えて死なせるのは積極的安楽死です。オランダの場合には、積極的安楽死まで認められているということになります」、「オランダのアムステルダムには安楽死病院というのがあり、“出張安楽死サービス”まであるそうです。オランダでは、安楽死であっても自己安楽死でも、家族や親しい友人たちと話し合い、彼らに囲まれて死んでいくそうです。その点では、一人で死んで行く自殺とは別物です。たしかに、延命措置が施され意識もないまま、病院でさまざまな管につながれて死んで行く死と、どちらがよいのだろうと考えざるをえません。オランダは大麻や売春が合法とされていたり、世界のさまざまな国々の中で、個人の自由を認めるということが、一番進んでいる国と言えるかもしれません」と書いている。

さらに島田氏は、約50年前の太田典礼氏の著作を引用し、「社会に迷惑をかけて長生きしている者も少なくない。ただ長生きしているからめでたい、敬えとする敬老会主義には賛成しかねる。ドライな言い方をすれば、もはや社会的に活動もできず、何の役にも立たなくなって生きているのは社会的罪悪であり、その報いが孤独であると、私は思う。老人孤独の最高の解決策として自殺を勧めたい。自由思想によれば、自殺は個人の自由であり、権利でさえもある。老人がもはや生きている価値がないと自覚したときに自殺するのは、最後の社会的人間行為である。**老人は治る見込みのない一種の業病である。**一番よいのは国外へ出ること、そして未開民族の仲間に入れてもらうことである。パスポートを捨てて、いくらかの土産と金を持って行けば歓迎してくれる。そこで行き倒れになれば、適当に始末してもらえる。私はこれを望んでいる」と書いている。最近、私の考えも、この太田氏に賛同できる部分が多くなってきている。「姥捨て山」ではないが、日本の僻地に、「老人安楽死特区」を作ったらどうかと考えてもいる。

島田氏は不良老人現象について、「現代は経験がどんどん更新されてしまい、個人ではなくて社会全体に蓄積されていきます。芸能や特殊技能を持っていれば別ですが、老人の価値は残念ながら年を重ねるにつれて低くなって

しまうのです。すると老人にはかなりのストレスが溜まります。昔は若者がキレると言われましたが、現代は老人がキレる。それはその人が、社会からは重要視されているかどうかというところと関係しています。昔でいうと不良の若者は、社会から必要がないと言われ、キレる。そうすることでしか、人間としての存在感を示せないわけです。だからかつて若者の犯罪と言われていたものが、そのまま高齢者に移ってしまっています」と解析している。私もこの解析が当たっていると思う。

また、島田氏はキリスト教が自殺を禁じていることについて、「人間が生きているということも、単に偶然生きているのではなくて、神の計画に基づいて生きているという考え方になるわけです。ですから、自殺も伝統的にいけないとされてきました」と解説している。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加 率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億ドル)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
5 月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6 月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7 月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8 月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9 月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10 月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11 月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12 月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014 年												
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年												
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。